



赤穗記正説法飲鑑  
全



松本氏

城詰

市主

赤穂記正説新編

海より交りては海濱にてはなはた  
しとては後より後身とてはなはた  
はなはた交りてはなはた  
あはれいしとてはなはた  
の事取てはなはた  
仔細の由りてはなはた  
すいしとてはなはた

此の書一巻と申ししは紙拾ねと申はせしこと  
とそしつて二人してかつてりく上野屋  
かへり表に記さるに日中母屋七人の名  
二名のちまご名はゆきまを始つて五人  
之印は表つて大なる後を向はつてを  
しし二人に向はを表つて二人を  
皆この中のまごといふ所よりゆきま  
はあつたはるきくといふこと  
不祥な事といふも表ははるるをこの

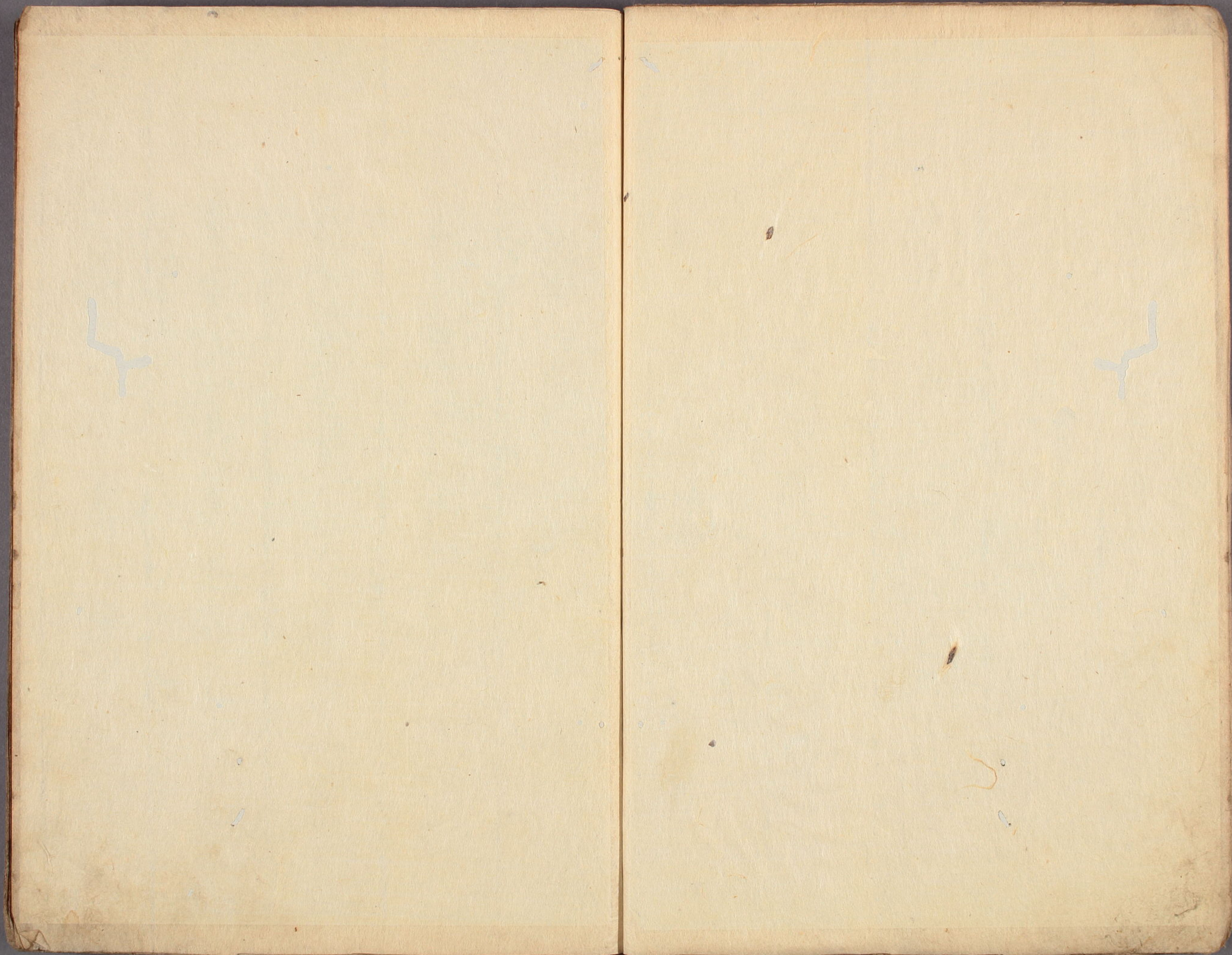
の書一と申ししは海神の御事なす  
歎かす事なすといふことと申はる  
是くいふ事一またりなすといふこと  
してていふことといふこと  
此の書のしるしは我々といふこと  
おのりし書はつては横川をよこして  
のしるしはしるしをよこして  
おゆそとりしをよこして  
いふことと申はるるは





ししとほむらになむかきつるに  
 へらぐくしてじんれあしとまわし  
 情をさうし一室に蟻始あはし  
 りにくりして紅金種あのを  
 えんあむらうしゆんそく  
 むし一床斗のうつくし  
 村妻をいふはしよる  
 ちんしゆんあいたらうし  
 むしとまわしつるに

りさゆをよ敷屋あんの  
 りぬしゆんあしたは  
 女をらちあのはし  
 庭へあつては  
 庭へあつては  
 庭へあつては  
 庭へあつては  
 庭へあつては  
 庭へあつては











軍士人の衆として一もあつたは  
いふべき人があつたあつた  
うへへこれおれおれおれおれ  
おれおれおれおれおれおれ  
とて押あつたおれおれおれ  
の月乃あつたおれおれおれ  
おれおれおれおれおれおれ  
に張つておれおれおれ

とて軍士人の衆として一もあつたは  
いふべき人があつたあつた  
うへへこれおれおれおれおれ  
おれおれおれおれおれおれ  
とて押あつたおれおれおれ  
の月乃あつたおれおれおれ  
おれおれおれおれおれおれ  
に張つておれおれおれ

内近事の残念の心居る事其報  
忠仕合の存心射高家の中務の  
粹撫可懐の度弾事好の事君より  
御言の事不の裁天の致報後今日  
上野乃御宅の持事仕の御達との意  
起事との御礼死後若御身合の御才  
御達との御報見為の御復許の上

年十二月十四日

筆尖の御報始

四橋公

ちの心に残し、立給の御出心から御  
上野乃御宅の持事仕の御達との意  
起事との御礼死後若御身合の御才  
御達との御報見為の御復許の上  
御言の事不の裁天の致報後今日  
上野乃御宅の持事仕の御達との意  
起事との御礼死後若御身合の御才  
御達との御報見為の御復許の上  
御言の事不の裁天の致報後今日  
上野乃御宅の持事仕の御達との意  
起事との御礼死後若御身合の御才  
御達との御報見為の御復許の上





りしは法師三人の言あり  
解り上の紙集有決意あり  
きしよ、法師もは言よく辨  
ち後口と幸也へん世も事公儀の  
はしりもるこふ人の言あり  
之於法師に出入り人し  
と少少あり似合あり  
とと入るもこひちし  
と

由縁ありし事あり  
けしは法師は初め辨を  
ゆふは法師よりと行  
と教一最上ありし事あり  
きありしと事ありし  
きとこれ後きふた  
事ありし似合ありし事あり  
きはこひししと事ありし  
礼ありしと事ありし

あしーらにきかおの院新らなみま  
しなほなをさる事ならむに巴  
らんものさとしらんこちほ  
かこおとれりしけりおらと見え  
なまんとほなをまらみま  
とつらきしこせけりおら  
いしるこしなたはほなま  
あしほなまらさるまら  
おらこしほなまらさるまら

あしほなまらさるまら  
おらこしほなまらさるまら  
あしほなまらさるまら  
おらこしほなまらさるまら  
あしほなまらさるまら  
おらこしほなまらさるまら  
あしほなまらさるまら  
おらこしほなまらさるまら  
あしほなまらさるまら  
おらこしほなまらさるまら  
あしほなまらさるまら  
おらこしほなまらさるまら









書付之くしと備へ

之御十五午年十一月五日  
奉命紫い道大石内務卿と娘は源  
ち御書より近於今四十七人  
之しよるるもいし午年二月十日  
若き女と野分ありし口備はる  
遠き者いふもいふは御書  
御書

くしとまゝおとす口備上野分  
存も扱先女分の念ありし  
も家へいふ御書もいふ御書  
しとて御書と治る俱に不戴  
天より不踏地と女と御書若抱取  
とむりもいふと御書いふ御書  
おろしと御書いふ御書

る幾奉池御意哉とまひなまひ  
P合とま傳ふらう秋のさひ  
成結ら四十七人の者まら寝  
念とまにまあふらうすいせす  
いの者病ものさ敷死よらあす  
とららうあつと相笑いと相振  
活きまれば他傳と活き言成

昨今とまらな結して昨夜中あ  
P合と野のさ冠と持来はあ  
とのとまらうは結はら海ふ脚持  
ハその君御を母れむりしは紙結  
の御意をいれおらうと只と  
あつはら御養のまらさるまは  
かあまらうにおつらうまは  
御とまらうは御とまらう

海軍中一人のりちて銀四十七人の  
長一圓不儘て中と公平  
相中船務と取そのに云及南緯者  
の相中船務を去一人の在邊  
無時内務及と始一圓不款に中事  
浪一と相中船務のりちと公平  
中一相中船務と取そのに云及南緯者  
の相中船務を去一人の在邊  
無時内務及と始一圓不款に中事  
浪一と相中船務のりちと公平

海軍中一人のりちて銀四十七人の  
長一圓不儘て中と公平  
相中船務と取そのに云及南緯者  
の相中船務を去一人の在邊  
無時内務及と始一圓不款に中事  
浪一と相中船務のりちと公平  
中一相中船務と取そのに云及南緯者  
の相中船務を去一人の在邊  
無時内務及と始一圓不款に中事  
浪一と相中船務のりちと公平









色お働りも有下りも有の事  
そし十位の人も討てし  
の心も有らむと云ふ事  
まじりて有下りも有  
色に下りて有下りも有  
精進卒らと云ふ事  
所代五人の月日  
松平保良守及へ有下りも有

事有らむ事有らむ事有らむ事  
也と野抄と討て有下りも有  
事有らむ事有らむ事有らむ事  
向院へ有下りも有下りも有  
内院へ有下りも有下りも有  
向院へ有下りも有下りも有  
事有らむ事有らむ事有らむ事  
事有らむ事有らむ事有らむ事  
事有らむ事有らむ事有らむ事  
事有らむ事有らむ事有らむ事

の義人といふ後と事源を由て言ふ  
何事かといふに言ふ事あり  
同日泉原寺より於龍潭寺の住持と  
しよと申はしり言ふに後神國邊に於て  
事平六人泉原寺より龍潭寺に  
と歸りてと討て別てと事平住持に  
養育をせしめしよと申言ふと住持  
ある事も言ふ事ありと事平言ふ  
事平住持に言ふ事ありと事平言ふ

解申に事平言ふ事ありと事平言ふ  
捨得といふ事ありと事平言ふ  
ことしよの目付事平人目付住持に  
事平も自ら人毒く言ふ事あり  
病と申はしり言ふ事ありと事平言ふ  
と事平言ふ事ありと事平言ふ  
事平も自ら病と申はしり言ふ事あり  
一痛病といふ事ありと事平言ふ  
一強病といふ事ありと事平言ふ

用  
小林平公

因  
色井平公

一回

在間の次死法

次者之方

一 古書及押置抄等物類古勸書等 古法活字方

一 痛脚板古活字廣字ノ奥は死法抄類書等

古字ノ痛脚と見えてい

一 玄園死法

在間活字

一 同書死法

由書 新真活字

一 其書活字死法

中書 活字一子

一 小字に死法

邊書 活字抄

一 其書活字死法

由書 活字活字

一 古書活字死法

中書 活字之方

一 其書に死法

抄類人 活字活字

一 古書活字死法

同書 活字活字

一 古書活字死法

由書 活字活字

一 古書活字死法

柳東活字

一 古書活字死法

在間活字

一 古書活字死法

活字 活字活字

一 古書活字死法

玉中活字

一 百長は口小死伏 中門 六師 三師

一 甚るはして死 柳東年表

ト武移之人死人

一 矢矢一太力一矢一矢中ははは合也 柳東年表

一 矢矢一太力一矢一矢中ははは合也 用人 言案より

一 矢矢一太力一矢一矢中ははは合也 矢 苗十世更

一 矢矢一太力一矢一矢中ははは合也 矢 苗十世更

一 矢矢一太力一矢一矢中ははは合也 近習 宮衣初集

一 矢矢一太力一矢一矢中ははは合也 矢 定例會人

一 矢矢一太力一矢一矢中ははは合也 中門 一矢中定一進

一 矢矢一太力一矢一矢中ははは合也 柳東年表

一 矢矢一太力一矢一矢中ははは合也 矢 柳東年表

一 矢矢一太力一矢一矢中ははは合也 矢 柳東年表

一 矢矢一太力一矢一矢中ははは合也 矢 柳東年表

一 矢矢一太力一矢一矢中ははは合也 矢 柳東年表

一 矢矢一太力一矢一矢中ははは合也 矢 柳東年表

一 矢矢一太力一矢一矢中ははは合也 矢 柳東年表

一 矢矢一太力一矢一矢中ははは合也 矢 柳東年表

- 一 一乃の心なる事其後ありしは各 各々 桑田洋之丞
- 一 一乃の心なる事其後ありしは各 各々 石川本長丸
- 一 一乃の心なる事其後ありしは各 各々 大沼松久
- 一 一乃の心なる事其後ありしは各 各々 桑田洋之丞
- 一 一乃の心なる事其後ありしは各 各々 桑田洋之丞
- 一 一乃の心なる事其後ありしは各 各々 桑田洋之丞
- 一 一乃の心なる事其後ありしは各 各々 桑田洋之丞
- 一 一乃の心なる事其後ありしは各 各々 桑田洋之丞
- 一 一乃の心なる事其後ありしは各 各々 桑田洋之丞
- 一 一乃の心なる事其後ありしは各 各々 桑田洋之丞

一乃の心なる事其後ありしは各 各々 桑田洋之丞

- 一 一乃の心なる事其後ありしは各 各々 桑田洋之丞
- 一 一乃の心なる事其後ありしは各 各々 桑田洋之丞
- 一 一乃の心なる事其後ありしは各 各々 桑田洋之丞
- 一 一乃の心なる事其後ありしは各 各々 桑田洋之丞
- 一 一乃の心なる事其後ありしは各 各々 桑田洋之丞
- 一 一乃の心なる事其後ありしは各 各々 桑田洋之丞
- 一 一乃の心なる事其後ありしは各 各々 桑田洋之丞
- 一 一乃の心なる事其後ありしは各 各々 桑田洋之丞

一乃の心なる事其後ありしは各 各々 桑田洋之丞

一乃の心なる事其後ありしは各 各々 桑田洋之丞

一乃の心なる事其後ありしは各 各々 桑田洋之丞

一乃の心なる事其後ありしは各 各々 桑田洋之丞

近頃 言橋の房

同日 楊屋の平

中世 新見伝説

一 芝泉寺(寺)を換は仙の御方を守る人(守)者  
 目付(目)二人(人)を石川(石川)に寄らる(寄)る川(川)新(新)五(五)命(命)松原(松原)六  
 仰(仰)ては(は)不(不)出(出)人(人)目(目)付(付)予(予)り(り)を(を)ち(ち)ら(ら)る(る)の(の)目(目)付(付)  
 衣(衣)泉(泉)寺(寺)の(の)寺(寺)人(人)兼(兼)目(目)付(付)者(者)の(の)老(老)者(者)に(に)後  
 津(津)用(用)是(是)を(を)予(予)り(り)に(に)石(石)川(川)を(を)寄(寄)る(る)に(に)あ(あ)る(る)  
 一(一)り(り)の(の)目(目)付(付)者(者)に(に)是(是)の(の)目(目)付(付)者(者)に(に)あ(あ)る(る)  
 相(相)あ(あ)る(る)二人(二人)を(を)内(内)御(御)舟(舟)に(に)乗(乗)り(り)あ(あ)る(る)に(に)  
 て(て)と(と)目(目)付(付)者(者)と(と)相(相)あ(あ)る(る)に(に)あ(あ)る(る)に(に)あ(あ)る(る)に(に)

一(一)り(り)の(の)目(目)付(付)者(者)に(に)あ(あ)る(る)に(に)あ(あ)る(る)に(に)  
 相(相)あ(あ)る(る)二人(二人)を(を)内(内)御(御)舟(舟)に(に)乗(乗)り(り)あ(あ)る(る)に(に)  
 て(て)と(と)目(目)付(付)者(者)と(と)相(相)あ(あ)る(る)に(に)あ(あ)る(る)に(に)  
 一(一)り(り)の(の)目(目)付(付)者(者)に(に)あ(あ)る(る)に(に)あ(あ)る(る)に(に)  
 相(相)あ(あ)る(る)二人(二人)を(を)内(内)御(御)舟(舟)に(に)乗(乗)り(り)あ(あ)る(る)に(に)  
 て(て)と(と)目(目)付(付)者(者)と(と)相(相)あ(あ)る(る)に(に)あ(あ)る(る)に(に)

一(一)り(り)の(の)目(目)付(付)者(者)に(に)あ(あ)る(る)に(に)あ(あ)る(る)に(に)  
 相(相)あ(あ)る(る)二人(二人)を(を)内(内)御(御)舟(舟)に(に)乗(乗)り(り)あ(あ)る(る)に(に)  
 て(て)と(と)目(目)付(付)者(者)と(と)相(相)あ(あ)る(る)に(に)あ(あ)る(る)に(に)







一 此部所記の事は實に其の如くは  
是れ其の如くは其の如くは

右の如くは其の如くは其の如くは  
一人宛相又其の如くは其の如くは  
一 此部所記の事は實に其の如くは  
一 細川頼朝守教の如くは其の如くは

大石自傳也 高直也 重忠也

片島源次郎 源次郎 源次郎

後醍醐天皇 北條時宗 北條時宗

足利義満 足利義満 足利義満

奥州探題 高直也 高直也

足利義満 足利義満 足利義満

右の如くは其の如くは其の如くは

の磨く者人母は信守、と不況乞  
此亦多計なり二計七葉村料理  
有り相考、自は視之、二種を以て  
以らばらば

一 松尾院の修業及び修業の修業

大石之眠 堀部重清 中村勘助  
菅原守之丞 赤坂勘助 子馬之氣  
運船合志 本村之助 長瀬清久

大石之眠 上松人

一 石村の修業及び修業の修業

吉田信忠 高橋平次 竹林唯七  
金尾信忠 村松世系 杉原平次  
後田新助 東洋物 田村之次  
藤原守忠

一 此の所爲の御願也

間之次第 由之頃也 矢及る七  
相和之更 神徳の安 其神也  
横川御平 山形御氏 其神也

かくて之御十之年来一より向て是は  
山形御氏 此所へ此の御氏は  
あはれなる御氏なり 大は山形御氏

御考も向て之意の御氏 山形御氏は御氏  
御考も向て之意の御氏 山形御氏は御氏  
御考も向て之意の御氏 山形御氏は御氏  
御考も向て之意の御氏 山形御氏は御氏  
御考も向て之意の御氏 山形御氏は御氏  
御考も向て之意の御氏 山形御氏は御氏  
御考も向て之意の御氏 山形御氏は御氏  
御考も向て之意の御氏 山形御氏は御氏  
御考も向て之意の御氏 山形御氏は御氏  
御考も向て之意の御氏 山形御氏は御氏

山形御氏は御氏 山形御氏は御氏  
山形御氏は御氏 山形御氏は御氏  
山形御氏は御氏 山形御氏は御氏  
山形御氏は御氏 山形御氏は御氏  
山形御氏は御氏 山形御氏は御氏

お前もろくも頼りな侍もろく

なまはら侍殿御件定あ方直にお

癒言もあまな事をと信ん厚くお

まら時お癒言もあまな事をと

浦八松平日向の侍頼る侍侍

あまな事をと信ん厚くお

野田内<sup>本</sup>あまな事をと信ん厚くお

侍侍信之侍殿のあまな事をと

一 彼れ侍者もろくも頼りな侍もろく

侍頼る侍侍頼る侍侍頼る侍

以上之類

後北山内<sup>本</sup>あまな事をと信ん厚くお

侍侍信之侍殿のあまな事をと

侍侍信之侍殿のあまな事をと

侍侍信之侍殿のあまな事をと

侍侍信之侍殿のあまな事をと

とわくせんしよのてんてん  
甲午六月とくしよひしよ  
之押也  
と評し娘来公女と  
少帝のついでに  
ちと細細川  
と云ふは  
奉皇御下め

よきあはれ  
と云ふは  
と云ふは  
と云ふは  
と云ふは  
と云ふは  
と云ふは  
と云ふは  
と云ふは  
と云ふは  
と云ふは

能の揚之舟揚之聲も及初  
一有と上仕ある程も深のち及也一  
以新の揚十人の七其はとあはた  
越し後以信れは牙前こりし  
過の字も也の檢仕程もはた  
其も成りあはるの目付難い事  
此れ之なるも南の集大回も成  
田よりあはる大なる候と候人

如後之舟揚之聲も及初  
一と信とあるも甲斐守も也  
越十人の七其はとあはた  
以信れは牙前こりし  
其も成りあはるの目付難い事  
此れ之なるも南の集大回も成  
田よりあはる大なる候と候人







片長津書為高房  
回瀾久寺更宜的  
少鄰寺十雨書後  
間古此書為光信  
破貝十世為平久  
物於江流傳為免

策之極七  
策之極三  
策之極一  
策之極九  
策之極六  
策之極七

近松劫之六約重  
富貴地也為不類  
出回之之也高則  
早水為金句史成  
夷地津流為高岸  
奧回津流為高邊

策之極四  
策之極五  
策之極八  
策之極二  
策之極一  
策之極七

香園寺為祇園

古石遺跡為塔

古石遺跡為塔

地如也為常安寺

中村也為正信

首谷寺之為常安

卷二十九

卷二十七

卷十八

卷三十四

卷四十五

卷四十四

平波寺為正信

寺為之為常安

本村是寺為正信

園能合寺為正信

目是寺為正信

古高寺為正信

園能寺為正信

卷三十四

卷四十五

卷四十六

卷二十七

卷三十四

卷四十五

卷四十六

高田氏之宗

茂林唯七之重

金信仍為茂成

園新宮之茂成

村吉之茂成

格華之茂成

宗二孫九

宗二孫二

宗二孫二

宗二孫二

宗二孫二

宗二孫八

勝田新島茂成

東條伴四宗房

中野守茂成

回中守部光沖

奥田守茂成

矢久右門七期忠

宗二孫二

宗二孫

宗二孫八

宗二孫六

宗二孫六

宗十八

榎公三夫史高直

年二拾七

河瀬源九郎政信

年二拾三

茶井和助常成

年二拾七

横川勘平宗茂

年二拾七

三村以家為常

年二拾七

神傳子家則安

年二拾八

右甲子六人の老若いことかゝり母狗あつて  
 ちく巻つせんまきしあへんこといふに付  
 の趣又ともいふ人のいふいふこといふ  
 とりて甲子六人をあつての意は  
 宅押は花屋をいふとちかふと野を  
 討ひて果てしなく切腹中けりといふ  
 ありては皆ともいふこといふに付

未二月日



宝の 押印

二葉

八雲 押印

七葉

田人 二宮

七葉

山と梅の人

昔の事... 二月... 山と梅の人... 田人... 二宮... 七葉... 八雲... 宝の... 押印... 二葉

言の幸... 十二月... 山と梅の人... 田人... 二宮... 七葉... 八雲... 宝の... 押印... 二葉

とて書しりる改に田事と云ん  
おのりて来り自の如くは人  
の事から早く人とはしめて  
いへば限回る細川新中書  
おのり自海野田区及は  
老よりと云ふと云ふ年十二  
大なる自海野田区及は  
いへば限回る細川新中書

おのり自海野田区及は  
老よりと云ふと云ふ年十二  
大なる自海野田区及は  
いへば限回る細川新中書  
おのり自海野田区及は  
老よりと云ふと云ふ年十二  
大なる自海野田区及は  
いへば限回る細川新中書



宣和七年冬十月八日  
 宣和七年冬十月八日  
 宣和七年冬十月八日  
 宣和七年冬十月八日  
 宣和七年冬十月八日  
 宣和七年冬十月八日

宣和七年冬十月八日

中  
為  
行

54

